ギヤマンビードロ

林京子

ギャマン ビードロ

林 京子

講談社

ギヤマン　ビードロ

昭和五十三年五月二十日　第一刷発行
昭和五十四年三月　八　日　第三刷発行

著者——林　京子
© Kyoko Hayashi 1978, Printed in Japan

発行者——野間省一
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二番二一号　郵便番号　一一二　電話東京　〇三(九四五)一一一一(大代表)　振替東京　八一二九九二〇
印刷所——豊国印刷株式会社　製本所——黒柳製本株式会社
定価——九八〇円
乱丁本・落丁本はおとりかえいたします。

目

次

空罐 7
金毘羅山 27
ギヤマン ビードロ 47
青年たち 67
黄砂 87
響 107

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

帰る　129
記録　149
友よ　169
影　189
無明　209
野に　229

装幀　辻村益朗

ギヤマン　ビードロ

空罐

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

校舎は、コの字形のコンクリート四階建てである。私たち五人は、その校舎に囲まれた中庭の、ほぼ中央に立っていた。時間は午後一時半をすぎている。太陽は西に廻りはじめて、中庭には校舎の影が写っている。五人が立っている場所も、既に陰になっている。

しかし、まだ、西向きの講堂には、陽が一杯にさしていた。

「洗面所の使用法について、一言」腰に両手をあてて、大木が四人に向かって言った。それは誰？その口調は、と西田が、大木を指して考える表情をする。あれは誰だったか。洗面所の使い方ばかりを注意する先生が、確かにいた。かめのこだわし、突然思い浮かんだ恩師の仇名を、私は大声で叫んだ。いやあ、と長崎弁特有の、柔らかい注意のしかたで、原が、私のオーバーコートの袖を引いた。そして、職員室に聞こえるよ、と言った。三十年も前の教師たちが、いま、職員室にいるはずがなかった。三十年前の教師たちばかりではない。職員室には、もう誰もいない。

かつての私たちの母校は、来年一杯で廃校になってしまう。生徒たちも、長崎市街を見おろせる台地に建った、新校舎に移転してしまっている。さっき、校門を入る時に見かけたのだが、玄

関の車まわしに植えてあったフェニックスは掘り起こされて、根を、あら筵で包んであった。私たちが女学生の頃にも、車まわしにフェニックスが植えてあった。枝ぶりからみて、多分おなじ木なのだろう。根元から三本に分かれたフェニックスは、三十年の歳月の間に、七、八米の大木になっている。この木も、新校舎の方に植えかえられるのだろうか。

校舎の内には、私たち以外には、誰もいない。城壁のようにつっ立った校舎は、コンクリートの壁面に音を吸いとってしまって、物音一つたてずに静まっている。

緊急通達事項が起きると、私たちは、よくこの中庭に集合させられた。大木が口真似をしている教師は理科の男教師で、緊急通達が終ると、ええ、と生徒に向かって話しかけながら、せかせか歩いて朝礼台に登る。そして大木の口真似どおり「洗面所の使用法について」と話を切り出す。生理用具の処理のしかた、水の流し方、使用上の注意を事こまかに説明して、特に冬になると便所の管が凍って水が外部に溢れ出てしまう、そのために校舎の外壁に白い水もれの跡がついて、はなはだしく校舎の美観を損なう、と流れの跡を指して私たちに注意する。終戦直後の殺伐とした時代ではあったが、やはり少女である私たちは恥ずかしかった。中庭に立って、まっ先に大木が想い出したのも、恥ずかしい思いが印象に深かったからだろう。その白い、水の流れの跡は巾を広げて、いまも残っている。

一階、二階と、壁面で階を追いながら、私は目を空に移していった。コの字に区切られた快晴

の空が、顔の上にあった。初冬には珍しい、暑さを感じさせる太陽の光が、コンクリートの直線に沿って輝いている。更に私は、目を四階、三階と下していった。校舎の窓は、全部が閉めてあった。無人の校舎にしては、ガラスはよく磨いてある。そして、各階の窓のことごとくに、ガラスがきれいに入っている。そのことが私には奇妙に見えた。

昭和二十年の八月九日の、原爆投下後から卒業するまでの二年間、この校舎には窓ガラスが一枚もなかった。爆風で弓なりに反った窓枠の隅に、サメの歯のように尖ったガラス片が処どころ、残っている程度だった。

更衣室や洗面所の、目かくしが要る場所には、板切れが打ちつけてあった。それも鉄の窓枠が、正常な箇所だけである。

反った窓枠の一つ一つを、どのようにして矯正したのか。あの当時のままの、縦横に仕切りの多い窓枠は、まっ直に伸びて、透明ガラスがはめこまれている。気をつけて見ると講堂側の窓に五、六ヵ所、流行のアルミサッシュの枠がある。上、下二段に分かれた窓は、そこの窓枠だけが銀色に光って、西陽に輝いている。矯正がきかない、破損のひどい窓のかわりに取りかえられたのだろうが、白い水の跡や、パテが目立つ赤さびた鉄枠の窓の中で、取ってつけた新しさが浮きあがっていた。

「この庭、こんなに狭かった?」と西田が中庭を見まわして言った。

「うちもいま、同じことを考えとったとよ」と原が言って、西田と並んで、中庭を見まわす。なかに入ってみん？　と和服を着ている野田が言った。

「へえ、入ってみよう、講堂ばみておきたか」と大木が言った。取り壊される前に、私も、あと一度、講堂を見ておきたい、と思った。

私たちは、生徒専用の通用口に向かって、歩いて行った。通用口には、鉄の錠前が掛けてあった。私たちは中庭を抜けて、フェニックスを掘り起こした土で汚れている玄関から、校舎に入った。

講堂の入口に立った瞬間、私たち五人は雑談を止めた。それぞれが、その場に釘づけになって、立ちすくんだ。講堂には何もない。式や行事の日に、私たち生徒が坐った木の長椅子も、細長い机もない。ただ一脚、背もたれが折れて、使いものにならない長椅子が、講堂の真中に置いてある。

舞台の幕も取りはずされて、白い胡粉の壁が、あらわに見えている。ピアノも、式次第を書きしるす黒板も、道具類は、運び出されてしまって、艶のない、ささくれた床に、乾いた雑巾が一つ、捨ててあった。私は天井を見あげた。細い板を張った天井には、淡い緑のペンキが塗ってある。色あいも、十糎巾の板目も、三十年前そのままの様子で、目の前にある。そして、乳色の球

状をしたシャンデリアも、当時のままである。

講堂は、明るく、ひっそりしていた。悲しゅうなる、と原がつぶやいた。追悼会——と私もつぶやいた。大木と野田が、無言でうなずいた。幕をはぎとられて裸になってしまっている舞台に向かって、私は黙禱をした。

卒業以来、私ははじめて講堂を見る。入口に立った時に私を釘づけにした思いは、音楽会でも卒業式でもない。終戦の年の十月に行われた、原爆で死亡した生徒や先生たちの、追悼会である。私が無言の祈りを捧げたのは、その日の、友人たちの霊に対してである。大木たちも、同じ思いだったろう。特に原と大木には、浦上の兵器工場で被爆した重態の体を、この講堂の床に横たえた想い出がある。原も大木も傷は癒えて、生き残ったが、何十人かの女学生たちは、先生や仲間たちにみとられて、この床の上で死んでいった。生徒数千三、四百人のうち、三百名近い死者が、八月九日から十月の追悼会までに数えられていた。浦上方面の軍需工場に動員されていて即死した者、自宅で白骨化した者、さまざまである。和紙に、毛筆で書かれた生徒たちの氏名は、胡粉の壁の端から端まで、四、五段に分けて貼ってあった。

クラス毎に、担任教師が生徒たちの名前を読みあげた。担任教師が被爆死しているクラスは、同じ学年の教師が、教え子たちの名を代って呼んだ。読みあげられる一人一人の名前に、生き残った生徒たちの間から、どよめきが起こる。そのうち、どよめきは静まって、私たちは気ぬけし

た者のように肩を落して、長椅子に坐っていた。三方の壁ぎわには、死亡した生徒たちの父母が坐っていた。父母たちは、追悼会がはじまる前から涙ぐんでいた。涙はおえつに変って、生徒が坐っている中央に向かって寄せてくる。悲しゅうなる、とつぶやいた原の言葉は、各人の胸によみがえった、あの日の想いを、率直に言い表わしていた。私は講堂に入った。そして中庭に面した窓辺に歩いて行った。西陽がさす窓を背にして、改めて講堂を眺めた。西田と大木が、寄って来た。

西田は腰の低い窓に寄りかかりながら、「原爆の話になると、弱いのよ」と言った。追悼会、の一言で、私たちが何を考えているのか、勿論西田にもわかっていた。西田は、被爆者ではない。私と同じように転校生である。小学校から入学試験を受けて、選ばれて入学した、はえぬきのN高女の生徒ではない。N高女の生徒たちは、入学試験で選抜された、という評価に対して誇りを持っている。だから、彼女らの転校生に対する評価は、同じN高女生であっても低い。しかし同じ転校生でも西田と私とでは、また微妙な差があった。

私は昭和二十年の三月に、N高女に転入している。そして八月九日、動員中に被爆した。西田が転校して来たのは、終戦の年の十月、追悼会の日からである。被爆したか、しないかの差は、そのまま、はえぬきの大木たちとの結びつきにまで、かかわってきていた。

西田が、弱い、というのは結びつき方で、弱さの原因は被爆したかしないかにある、と西田は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com